

■ 言語活動の充実を図るための視点について



現行学習指導要領で初めて言語活動例が示され、各学校では様々な取組がなされ、多くの成果をあげている。その一方で、学習のねらいが明確でなく、「活動あって学びなし」の学習活動が見られたり、言語活動が発展学習だと誤解されたりするなどの課題も指摘されている。

これらの課題を踏まえ、言語活動例の具体化を図り、言語活動の充実を図るための視点として以下のようなことが考えられる。

1 学習のねらいを踏まえた効果的な言語活動の工夫

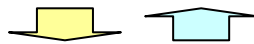
(1) 身に付けさせたい力を明確にした言語活動

言語活動は、どんな力を身に付けさせたいのか、どんな力を活用させたいのか、これからの学習にどうつなげたいのかなど、国語科の目標を達成するために行われるものである。そのことを明確にして、単元の指導計画を立てたり、授業の構成を考えたりすることが大切である。

【目標・指導事項・言語活動例の関係（中学校第3学年の例）】

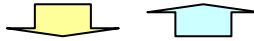
○こういう力を身に付けさせるために（「読むこと」領域の目標）

目 標	目的や意図に応じ、文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力を身に付けさせる。
-----	--



○具体的にこういう指導事項を（「読むこと」領域の内容）

指 導 事 項	文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。
---------	-------------------------------------



○このような言語活動を通して身に付けさせる（「読むこと」領域の言語活動例）

言 語 活 動 例	○物語や小説などを読んで批評すること。 ○論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読むこと。
-----------	--

なお、身に付けさせたい力を明確にした言語活動を行うためには、指導事項の系統を明らかにし、どの段階でどのような力を付けていくのか、同じような指導事項でもどのような違いがあり、どう重点化を図っていくのかを十分に理解した上で、計画していくことが大切である。

(2) 日常生活や社会生活と関連を図った言語活動の工夫

言語活動に取り組む際には、発達の段階に応じて、日常生活や社会生活の中の具体的な活動の場面を想定して行うことが重要である。そのことが、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けることにつながる。

2 各領域の関連を図った言語活動の工夫

国語科の学習活動は3領域すべての要素を含んでおり、新学習指導要領でも「相互に密接に関連付けて指導する」ことが求められている。

また、それぞれの領域の言語活動例も、下の例のように関連のある内容があることを踏まえて、各領域の関連を図った言語活動の計画を立てる必要がある。

(例) 小学校5・6年

領域	言語活動例
話すこと・聞くこと	ウ 事物や人物を推薦したり、それを聞いたりすること。
書くこと	ウ 事物のよさを多くの人に伝えるための文章を書くこと。
読むこと	エ 本を読んで推薦の文章を書くこと。

3 基礎的・基本的な知識・技能と言語活動とをつなぐ工夫

習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用して言語活動に取り組む際、教材文で学習し習得した知識・技能を整理し、どのように活用して言語活動に生かせばよいのかを再確認して、言語活動につなげていく学習場面を工夫することが必要である。

4 年間指導計画への位置付け

言語活動を意図的・計画的に取り入れて学習効果を高めるためには、1年間の学習内容やねらいを明確にし、指導内容の重点化を図るとともに、どのような言語活動が効果的であるかを考え、年間指導計画に位置付けていくことが大切である。

【言語活動例の具体化とは】

言語活動例の具体化とは、示された言語活動例を授業のねらい、教材の特色、児童生徒の実態などに応じて、具体的な学習活動を計画することである。

例えば、小学校第1・2学年の「読むこと」領域の言語活動例である「物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること」の具体化を図り、「物語を演じる言語活動」を取り入れる場合、その方法として、何をどのように演じさせれば効果的かを考え計画することである。演じさせる方法として、役割演技、ペープサート、紙芝居、影絵など多様な活動が考えられるが、どの方法が学習のねらいの達成によりつながるか十分に検討することが重要である。